

# 随想

## 昨今の世相

株P P Q C 研究所 加藤 宏光

COVID-19騒動が始まって以来、この三年間は何か騒がしい。とくに、ロシアがウクライナへ侵攻を始めてからというものは、コロナ騒動の漫然とした不安感に何とない切迫感まで迫ってきている。

そうはいくものの、安倍元首相が射殺されて、何かが大きく変わったかといえ、そうでもない気もする。昨日閣議で決定された国葬も、何とない薄闇の中で、直接の利益集団の思惑で押し切ろうとしているように思われるが、野党の反対論も与党の圧力に抗い切れぬ様子で、何となく押し切られて、何となく進められ、いつの間にか利益集団の思惑にはめ込まれてゆくのだろうか。

近頃読んでいる白井聡教授(注1)の近現代日本の社会分析本によれば、わが国の民主主義が未熟であることに主因があるようである。この解説は極めて重く、極めて重要であると思うが、今回の随想で扱うには重すぎるので、脇におこう。

久しぶりに週間新潮と週刊文春を二〜三週分読みし読みをした。あまりにも世の中がややこしく、そのややこしさに皆が慣れ始めている気がして、世間のみなさんがどう受け止めているのか感じたからである。

新潮の随想ページに、五木寛之氏(注2)によるもの(七月七日号と十四日号の二週間続き)と文春(七月二十八日号)に林真理子氏のものがあり、著者の年代とも相通じる気がした。五木寛之氏の記述では、『生き抜くヒント』と題された七日号で『倍速で変わる世の中だ』、十四日号では『週間新潮が一冊五、〇〇〇円になる日』と副題

が付いている。七日号の内容には、コーヒーマカフェインが胃にこたえることから年齢の壁を感じた、というご自身の肌体験を自転車で転んだバイデン大統領やプーチン大統領の年齢と重ね、年齢にも負けず現役であり続けることに言を及ぼせている。他愛のない逸話に、近年では三組のうち一組が離婚する日本の現状を取り上げ、ご自身の若い頃のわが国の実情との乖離が思わぬほどに著しいこと、対としての男女間の役割分担に過去とは大きく異なっている点として、料理のできる男が女性の結婚条件に挙げられていることに触れ、世相の変化が大きく変わっていることに驚きの声を上げています。

十四日号では、最近の物価急上昇に焦点を当てている。もともと安倍政権が黒田日銀総裁を

芋等の食物を買い出しに行った際に付いて行ったことやその折に、農家のおじさんがくれた麩(ふすま)で作った蒸しパンの不味さ、一家五人の昼食がザルひと盛りの空豆であったこと等を覚えている。一二歳の五木氏が、当時の混乱経済の状況を肌で感じたとしても納得できる。氏は当時のインフレについて、次のように述べている。

早く察して現金を下ろし、札束を山のように押入れに隠した小金持ちたちには、新円切り替えという事で、古いお札を使えなくした。——中略——

超インフレの進行していた末期のソ連では、サイドビジネス(賄賂)が横行していた。自衛のためのコンミュニオンにはルーとモラルがあり、得た賄賂はプールして仲間と分配する。エシカルな賄賂道が歴史的に形成されていたのである。民衆は自衛する。来るべき超インフレを想起せよ。』氏はこの稿をこう結んでいる。

『もう七〇年も昔のことになるから、記憶している人は多くないはずだが、戦後(預金封鎖)というものがあつた。いわば国民に対する経済制裁である。そんな乱暴なことができるのかと今の人たちは思うだろう。それができるのだ。その情報をいち

早く察して現金を下ろし、札束を山のように押入れに隠した小金持ちたちには、新円切り替えという事で、古いお札を使えなくした。——中略——

超インフレの進行していた末期のソ連では、サイドビジネス(賄賂)が横行していた。自衛のためのコンミュニオンにはルーとモラルがあり、得た賄賂はプールして仲間と分配する。エシカルな賄賂道が歴史的に形成されていたのである。民衆は自衛する。来るべき超インフレを想起せよ。』氏はこの稿をこう結んでいる。

この餌高と卵価安に混沌とするわが業界を見ても?』と叱られそうであるが。

林真理子氏(注3)は週刊文春のおなじみエッセイストである。現在六八才の彼女が七月十四日号に書いた随筆『夜ふけのなわとび』の副題が『八〇歳の壁を越えること』とある。内容は他愛のない雑談で、林氏本人のスケジュール管理を任せられ

ている秘書との相手が誰かわからないヒトとの会食予定についての挿話を経て、本人の記憶老化を自虐し、下村満子さん(注4)等八〇歳を越えてかくしゃくたる人生を送る先輩方へのリスペクトを顕し、『亡くなった安倍元首相が八〇歳まで生きていたらどんな人生を展開したか』と述懐して終わる。

コロナ騒動やロシア・ウクライナ戦争に加えて、世界を席巻するインフレの波に円の弱体化。相当混乱している世相にこんな他愛もない記述が週刊誌に続くことで、改めて『日本はいい国!!』と思わされる。

『この餌高と卵価安に混沌とするわが業界を見ても?』と叱られそうであるが。

林真理子氏(注3)は週刊文春のおなじみエッセイストである。現在六八才の彼女が七月十四日号に書いた随筆『夜ふけのなわとび』の副題が『八〇歳の壁を越えること』とある。内容は他愛のない雑談で、林氏本人のスケジュール管理を任せられ

下村満子(注4)は八四歳のジャーナリスト。一九六五年朝日新聞社入社後編集部、ニューヨーク特派員等を経て一九九二年まで朝日ジャーナル編集長。一九九四年退社後、財団法人東京顕微鏡院の経営を両親から引き継ぐ。

下村満子(注4)は八四歳のジャーナリスト。一九六五年朝日新聞社入社後編集部、ニューヨーク特派員等を経て一九九二年まで朝日ジャーナル編集長。一九九四年退社後、財団法人東京顕微鏡院の経営を両親から引き継ぐ。